

もくじ

零章・凜として咲く花の如く... 005

序章・華と月... 008

一章・恋とガトリング砲... 024

二章・イブの時代?... 074

三章・最強に伝説で最高に天下無双の爛漫少女... 112

四章・大和撫子はロックに決める... 170

五章・六人目のメンバー... 204

終章・凜として咲いた花の如く... 245

あとがき... 257

コミック 1話... 262 2話... 266

和泉一舞

いずみいぶき

流行に敏感なまり
花の親友。実家の
服屋のセンスに不
満らしい。

山形まり花

やまがたまりか

ふわりのほんと
した女子高生。実
家はレコード屋
『サウダージ』。

あま

あま

芽兎めう

うさぎ

はんて屋『兎月堂』
の娘で、秋葉カル
チャーが大好きな
中学生。

霜月凛

しもつきりん

破滅願望があるサ
ブカル系女子。古
本屋『霜月書林』
の娘。

礼儀正しい優等生
に見える、喫茶店
『シャノワール』
の看板娘。

春日咲子

かすがさきこ

零章・凜として咲く花の如く

それは、圧倒的な迫力だった。

ステージを鮮やかに照らし出すライト、乱れ散る花吹雪、身体の芯まで響いてくるような大音響のメロデー。

所狭しと押し寄せた群衆の気持ちは際限なく昂ぶり、目の前で繰り広げられる夢のような演奏に魅了される。

歌うは紅色リトマス、奏でるは『凜として咲く花の如く』。
杖を楽器に持ち替えた魔法使いたちが魅惑の時間を振りまく。

この時、誰もが魔法にかかっていた。

音楽という魔法に。

「すごい……」

やがて、魔法は一つの種を産み落とした。

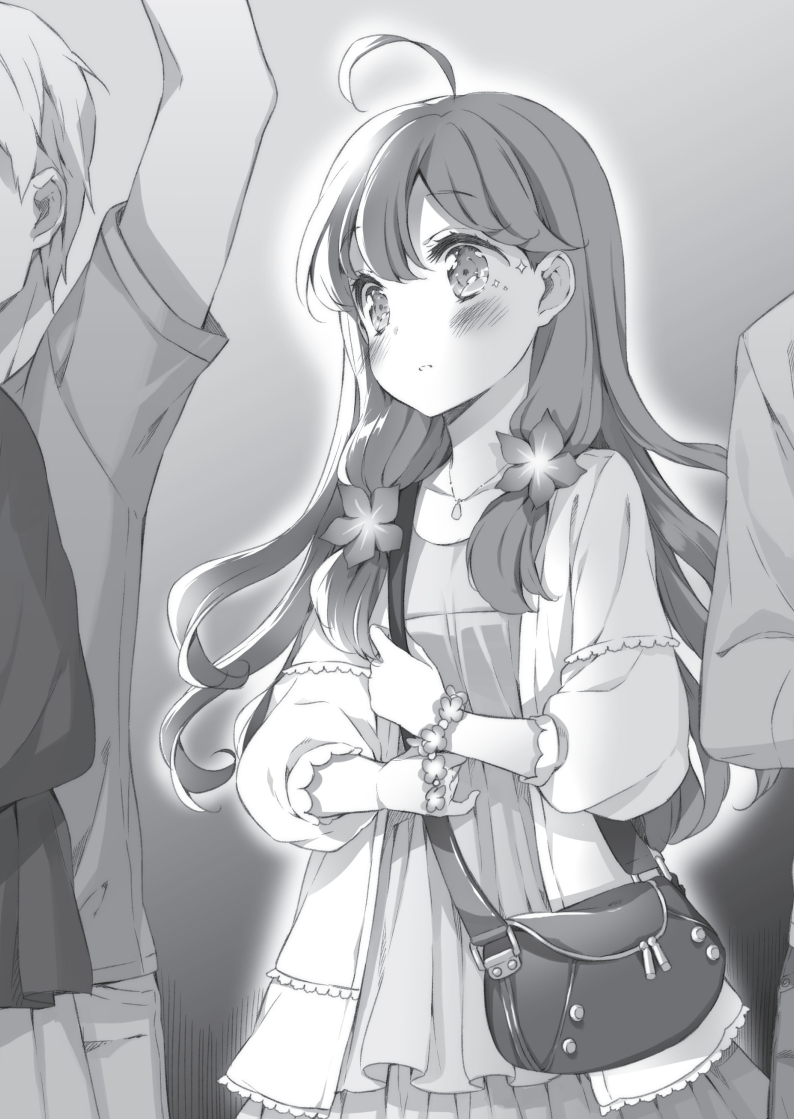
とても小さく、拙く、独りぼっちの種——それでも、精一杯に芽吹こうとする種だ。

この幼い種は芽吹くことができるだろうか。咲くことができるだろうか。
それは誰にも分からない。

ただ一つだけ確かなことは――

「音楽って……すごいっ！」

その種は希望に満ちていた。



序章・華はなと月

「俺と付き合ってください！」

「パス」

こうして月浦つきうら驅の青春は終わった。

「……いやいや、ちよつとは悩なやんでよ！ 悩なやむ素振そぶりもなし!？」

梅雨つゆが明けた六月 中旬ちゅうしゅん、放課後の私立天神学園てんじんがくえんの校舎裏にて。

この学校に通う高校三年生の月浦驅は気を取り直して食らいついた。

「一世一代の告白だよ？ 男の命運をかけたチャレンジだよ!? それなのにコンマ二秒なんてあんまりじゃないか！」

どうして分かってくれないんだ、と必死に訴うえる。

「そんなこと言われてもお……」

駆に迫せまられた少女は面倒めんどうくさそうに視線を逸そらした。

背丈せたいは駆よりも頭半分ほど低い。少し外にはねたクセのあるショートヘアに、勝ち気な大きな瞳ひとみが印象的な女の子だ。ボーイッシュという表現が似合う。

でも決して男の子っぽいわけではない。胸やお尻しりは慎つつましくもしっかりと女らしさを主張しやうしていて、スカートから覗く太ももには瑞々みずみずしさがあふれている。

「あなたの悪名、知ってるんだけど」

加納華子かのうはなこ——少女の名前である。

「あ、悪名……俺はこんなに真剣まけんなのに！」

心外だと駆は語氣あを荒らげた。

「あのねえ……」

真面目まじめな顔な駆に気の毒な視線を投げかけながら、華子は大きくため息をついた。

「あんた……今月に入って何回告白した？」

「これが初めてだよ！」

「そうじゃなくて、あたし以外には？」

「……五回かな」

「六回よ！ あたしが噂うわさで聞いているだけで、あんたは今月だけで六回も告白してるの！ どれだけ回転が速いのよ！」

「回数なんて重要じゃない！ 大切なのは、一番好きだっと思って思った相手に想いを伝えることだよ！」

駆はとても真面目に、真心を込めるようにして訴えた。

「あんたの場合、その一番が巡ってくるサイクルが短すぎるの」

しかし、そんな真心も日頃の行いのせいで台無しだった。

「そんなんじゃないや誰も真剣に告白を聞くわけないでしょ？ 浮気性の男に告白されたって嬉しくないわ」

「なっ、浮気なんてしない！ 俺は一筋だ！」

「うわっ、単語だけならキレイだけどあんたが言うとき驚きの軽さね」

華子は心底呆れたように後ずさった。

「さすが……『恋のガトリング砲』の異名は伊達じゃないわね」

駆とはクラスの違う華子だが、彼の異名は同学年のみならず学内でも有名だった。

月浦駆——通称、『恋のガトリング砲』。または『恋愛フルオート』、中には『連射しすぎるスナイパー』なんてものもある。

とにかく駆は惚れっぽい。おまけに変に積極的で、好きになったら即告白という流れができあがっている。

それだけなら単なる女好きと、軽蔑されて終わりかもしれない。

しかし駆が厄介なのは「一度に惚れる女の子は一人だけ」というところだ。

つまり、惚れてから告白するまでは、紛れもなく真剣であり一途なのだ。誰か一人を好きになっている間に他の女の子に目移りすることは絶対にない。

そういう意味では極めて紳士である。

ただ悲しいかな、彼は絶望的なまでに立ち直りが早いのだ。

告白を断られ、失恋の痛手に涙で何日も食事がのどを通らない——ということがない。

一つの恋が破れたら即次の恋へとチャレンジできる、鋼のハートの持ち主だった。駆がそういう恋愛感覚だから、いつも告白は連戦連敗だった。

「そんなに真剣に話を聞く女子がいるわけないっての」

それも当然だろう。たとえ真剣に告白していると分かっているにしても、ここまで負の連敗記録が積み重なっているのは、女の子だって受け入れられるわけがない。

「自分がここで告白を断っても、どうせすぐ別の女子のところに行くんだし——そう思うのは当たり前だろう。」

そしてこれまでの女の子と同じように、華子もまた駆を受け入れられないのだった。

「そんな……呼び出しにに応じてくれたのに、これっぽっちもその気がないのかっ!？」

「断るために来たのよ」

無視していたらずっと付きまとわれそうだし、と華子はぼやいた。改めて言うが、彼は恋愛自体には紳士なのだ。意思表示をしてあげない限り、熱心にアプローチしてくるだろう。

さつさと振って解放してあげるのがせめてもの情けというものである。

「まあ、下手なガトリング砲も数撃ちゃ当たるって言うし……そのうち、そんなあんたでも受け入れてくる女の子が出てくるわよ」

そう、ナイチンゲールやマザーテレサ級の慈愛の心を持った聖母が——きつと世界中を探せば一人くらい生き残っている。

「そんなっ!」

「そういうわけだから。じゃねー」

駆を残して軽やかに立ち去ろうとした華子は、しかしがつしと腕を握られて前に進めなかった。

「ちよつと、もう断ったんだから……」

「俺……本気なんだ」

駆はさつきと変わらない眼差しで華子を見つめた。

「あ、あれ……」

一瞬間、華子は混乱した。ちゃんと振ってあげれば、彼が未練がましいことはしないという噂を聞いていたからだ。

だからこそ恋のガトリング砲なんて二つ名が付くのだが、今回の駆は彼女が知らないパターンだった。

「ウソ……ちよつと……」

瞬間、華子は急に恥ずかしくなった。

馴れ馴れしく触られたからではない。

他の女子たちとは違う反応を、駆が自分だけに見せた——そう考えたら無性に顔が熱くなった。

(ま、まさかこいつ……今度は本気で本気なの……!?)

自分が特別なのか。他の女の子たちとは違う、自分にだけは彼は——本当に紳士なのだろうか。

「やだ、待って、そんな……」

こうなると攻守逆転である。華子は口では拒絶しながらも、駆の腕をふりほどけなかった。

「もう一度だけ……よく考えてくれないか……」
駆の声が、なぜか胸の奥にしみいつてきた。

「あ、あたし……そうじゃなくて……」

（なにテンパってんのよ！）

こんなの自分らしくないと思うのに、身体が自由に動かなかった。

彼の声が、体温が、息遣いが——いろんなものがとても近くて、それなのに嫌悪感はどこかに消えちゃって、不思議な安心感がわいてきて。

じつと見つめられる駆の瞳に吸い込まれそうになって――

ガサツ!!

「だ、だれっ!？」

近くの茂みが動いた。反射的に華子が身を引き、結果的に駆の手も外れた。

華子と駆が同じところを不安そうに見守っていると、

「……ごめんなさい、人がいるとは思わなかったの」

一人の少女が茂みの向こうから姿を現した。



物憂げな表情にストレートの黒髪、すらつとした肢体は華子よりも大人びていて、深窓の令嬢というイメージがぴったりだ。

「あなた……霜月さん？」

あまり話したことはなかったが、確か同じクラスだったと思い出す。

霜月凛——それが少女の名前だった。

「静かなところで本が読みたかっただけ……すぐに退散するわ」

凛は言葉少なに來た方向に戻ろうとする。

「ちょ、ちょっと待って！」

華子は慌てて追いかけた。

「あつ、まだ返事が……」

「ごめーん、霜月さんと一緒に帰る約束してたんだ！」

もちろんウソだ。でもこうでもしないと、ここから無事で帰れない気が——大きな間違いをやらかしてしまいそうな気がして必死だった。

「待たせてゴメンね、霜月さん！」

「私は読書を……」

「さあさあ！ レッツゴーホーム！」

「ちょっと……」

馴れ馴れしくされて不快そうな凛に心の中で謝りつつ、華子は強引に彼女の腕を取った。

「待ってくれよっ！」

駆の強い言葉が、否応なしに華子の足を止めた。

「まだ返事を……返事を聞かせてくれ……」

ゆつくりと、華子の背中に向かって歩み寄る。

「えっと……そういうのはまだ困るっていうか……」

一度芽生えてしまったときめきのせいで、反抗の言葉も力がない。華子のか弱い女の子もどってしまっていた。

「頼むから……」

駆が華子に再び手を伸ばす。

彼女の肩に触れようとして——横から払い落とされた。

「邪魔よ」

凛が冷たい声で言い放った。

「これ以上、私を不愉快にさせないで……」

そう突っぱねると、凛はさっさと歩き出した。

「えっ？ ま、待ってー！」

慌てて華子も追いかける。このチャンスを逃すわけにはいかなかった。

二人の背中が相次いで小さくなる。

「そんな……」

二人を見送りながら、駆は伸ばした腕をまだ下ろせないでいた。

「……どこまで付いてくるつもり？」

後ろを歩く華子に凜は冷たく言った。

「いやはや、危ないところをサンキューね」

凜の不機嫌もどこ吹く風で、華子は気さくに話しかけた。

「霜月さんだね、同じクラスの。ちゃんと話すのはこれが初めてだねー」

六月も半分が過ぎた時期に初めての会話だった。教室でも寡黙で人付き合いの良くない凜と、ムードメーカー的な華子とでは、一緒になることなんてなかった。

「あたしの名前覚えてる？」

「さあね……」

「わっ、素っ気ないなあ……」

凜のツンとした返事に気分を悪くすることなく、華子は凜の前に回り込んで彼女の顔を覗き込んだ。

「加納華子だよ。みんなからは縮めて『かのこ』って呼ばれてる」

「……そっ」

凜はやはり無反応のまま、華子を華麗にスルーした。

「ちよっとちよっと、せつかくなんだからお話ししようよっ！」

あつさりと無視されても華子はめげなかった。

ちゃんとお話してみたいという興味もあったが、それ以上に気を引かれるものがあった。

「ところで……なんでギターケースなんて持つてるの？」

そう、凜は読書とか言いつつ、その肩にはギターケースが引っかかっていた。

「……気づいていたの？」

「そんなおっきなの気づかない方がおかしいって」

「……くっ、誰もいないと油断した私が愚かだったわ」

凜がわずかに口を尖らせる。

「帰る前に軽く弾こうなんて思ったのが運の尽きね……あんな拙い戯れ事に巻き込まれる

なんて……」

キラキラキラキラ――

「なによ……」

凜はさっと身を引いた。

まるでお菓子の家を見つけた少女のように、華子が瞳を輝かせていた。

「やっぱりギター弾けるんだ！」

「……………嫌よ」

「ま、まだ何も言っていないよう……」

「顔が大声でお願いしてるわよ」

ギターを弾いてみて、と。

「いいじゃんいいじゃん！ あたし聴きたい！」

「……………はあ」

凜は盛大に肩を落とした。

とあるバンドに誘われ、その一員となって数週間。

メンバーに後れを取るまいと学校にも楽器を持ってきて練習してきた。

最初こそ生徒たちに変な目をされたが、ガン無視を貫いたおかげでやっと静かになった

というのに。

「厄介なのが残ってたわね……」

華子みたいに、こっちの都合などお構いなしに突っ走られるのは苦手だった。

「レコード屋が二人になったみたい……」

「レコード？」

「何でもないわ」

思わずもらした言葉を引つ込め、凜はやっぱり華子をスルーした。

「ちよ、ちよっと待ってよーっ！ 霜月さーん！ 凜さーん？ りんりん〜」

「それは止めて」

そんな呼び方をされるのは一人で十分すぎる。

「あつ、止まってくれた」

「……………分からないようだからはっきり言っておあげる」

凜は華子の正面に立った。胸を張り、腰を少しひねり、あごを上げ、見下すように流し目を送った。

「あなたなんかにつき合ってる時間はないの。この私の貴重な一分一秒が、あなたのために浪費されるなんて耐えられないわ。これはお願いじゃなくて忠告、いいえ宣告よ。もう

私に聞わらないで。分かった？」

息継ぎなしに一氣にまくしたてた凜を、華子は目を丸くしたまま眺めていた。

「……ふん」

やっと静かになったと凜は安堵した。これだけ徹底的に言ってやったのは久しぶりだった。これまでギターについて首を突っ込んでくる不屈き者は、いつもこうやって追い払ってきた。

これでもう近寄ってこないだろう——そう安心した凜は、華子に「暫もくれることなくさっさと立ち去ってしまった。

「……なんなの、あれ」

一方の華子はまだ衝撃に吞まれたままだった。凜を追いかけることもできず、その場に立ち尽くしていた。

それでも時間が経つてくると、次第にふつふつとこみ上げてくるものがあつた。

「何なのよあれっ！」

華子はギョツとこぶしを握りしめ、近くの茂みをゲシゲシと蹴りたくつた。靴下を通して足首や脛に枝がチクチクと刺さつても気にしなかった。

「あんなの……あんなの……っ！」

言葉にできない感情の渦はやがて、逃げ場を求めるようにして彼女の口へとせり上がってきて——

「すっ……ごくカッコイじゃん！」

凜にとって厄介極まりない友人がここに誕生した。

一章・恋とガトリング砲

倉野川市、日向美地区には一つの商店街がある。

その名もそのまま、日向美商店街だ。数十年前は活気にあふれていた街も、その輝きは近代化の波に取り残されてすっかり鄙びている。隣にあるさくら野ニュータウンに活気を根こそぎ持っていかれ、静かさと侘びしさだけが漂う。

『ちくわパフェ』という珍味だけが唯一の名物だが、それすらも食べる人を選んでしまうためマイナーなままだ。

そんな、何から何まで古くて寂しくて、このまま日影に取り残されると思われていた商店街にいま——一粒の光の種が芽吹きつつあった。

「のーりよーさい？」

聞き慣れない言葉に、山形まり花は首をかしげた。

くりっとした大きな瞳に、憤まじやかな鼻筋を通り過ぎて、桜色の唇がちよこんとある。

背中まである栗色の髪が、首をかしげた拍子にふわりと軽やかに揺れた。

「なによまり花、知らないわけじゃないでしょ？ 何年ここに住んでるのよ……」

『倉野川納涼祭』と描かれたポスターを丸め、和泉一舞はまり花の頭をポンポンと叩いた。ギャル系ファッションに身を包み、スタイルの良さを惜しげもなく披露している少女である。ツンとした顔つきに、勝ち気そうな力強い瞳の姉御肌だ。

まり花と同じ日向美高校に通う二年生だが、二人が並ぶと姉妹にしか見えない。

「あああああ……だってイブ、わたしそんな聞いたことないよ？」

まり花が両手で頭をガードする。ちなみにイブというのは一舞の愛称だ。一舞を縮めてイブである。

「まり花ちゃん、夏祭りのことですよ」

そこで、優しく教えるように春日咲子が耳打ちした。

クセのないショートボブの髪に、落ちていた物腰のおっとりした女の子である。ちなみに同級生のイブに勝るとも劣らない——まり花にはもちろん大勝利の——スタイルの持ち主だったりする。

「あつ、お祭りのことなんだ！ イブが変な言い方するから分からなかったよ」

「あんだ、高校生なんだから納涼祭くらい分かりなさいよ……」

イブが情けないと首を振る。

「そんなこと言われても……めうめうだって分からないよね？」

口を尖らせたまり花が隣にいた中学生に訴えた。

まり花よりも小柄な身体に、大きめのカバンを背負っている。ウサギのヘッドホンにフリリのスカート、カラフルなニーソックスと、ちよつとしたコスプレだ。

「めうしってた！」

そんな格好をしながら愛くるしい笑顔を振りまく少女の名前は芽兎めうという。めうはちくわパフェ——通称、ちくパを頬張りながら手を挙げた。

「ウソ！ 知らないのわたしだけ」

「だから言ったじゃん……」

「はう……世間の風が冷たいよ……」

「また変なこと覚えて」

落ち込むまり花はとりあえず放置して、イブは話を元に戻した。

「倉野川納涼祭といえは、『チヤスコ』のあの広い駐車場を開放して、たくさんのお店や出し物が集まる一大イベントよね？」

日向美商店街と打って変わって、さくら野ニュータウンは大型ショッピングセンターの

チヤスコを筆頭に、日々発展を続けていた。

そのチヤスコの駐車場が納涼祭の間だけは開放され、祭りの会場となるのである。

「そこで開催される最大のイベントといえはっ……」

「花火！」

祭りと聞いてさっそく立ち直ったまり花が元気よく手を挙げた。

「それもあるけど……」

「わたあめ！ 焼きリンゴ！ もろこし！ たこ焼き！ お好み焼き……あたっ！」

「食欲に負けるんじゃないっての」

食べることで頭がいっぱいのまり花にチョップをお見舞いして邪念を追いつけてやる。

「イブたちがここに集まった意味を思い出しなさいっての！」

まり花たちがいるのは、日向美商店街のレコード店『サウダージ』の二階だった。まり花の家であり、かつてバンドマンだったまり花の父によって、ちよつとした音楽スタジオがこしらえられている。

「あっ……そういうことですね！」

「めう分かった！」

「えっ！ えっ!? またわたしだけ？ お祭りなのに金魚すくいよりも大切なものがある

の!？」

今度は遊ぶ方に流されたまり花を放^{はな}っておいて、イブは咲子とめうに向かつて大きく額^{うで}いた。

「この納涼祭の……ライブコンテストに出るわよっ！」

山形まり花、和泉一舞、春日咲子、芽鬼めう——日向美商店街で生まれ育った四人の少女たちは、寂れた商店街を盛り上げようと結成されたバンドグループ『日向美ビタースイーツ』、通称『ひなビター』のメンバーだった。

「……で、凜はどうしてさつきから黙^{だま}ってるわけ？」

実はもう一人いるのである。イブはさつきからリアクションの一つもしないで、無反応を決め込んでいる少女——霜月凜に声をかけた。

彼女もまた、日向美商店街にある古本屋『霜月書林』の娘だった。

「いえ……バンドのリーダーがこんなで大丈夫かと不安に……」

まり花たちのやり取りを傍観^{ぼうかん}してしみじみと思うのだった。

傍^{はだ}目には信じられないだろうが、このバンドのリーダーはまり花である。

とあるライブで、一つになって盛り上がる聴衆を見たまり花が、自分たちもバンドを組んで元氣のない商店街を活性化させようとしたのが始まりだ。

そこからまり花が集めたメンバーがここにいる四人である。

「まあ、ぼわぼわ娘^{むすめ}でも行動力はあるのは確かだけど……」

改めて考えてみると不思議なものである。

「こんなリーダーについていくなんて……私も数奇^{すうき}な巡^{めぐ}り合わせに翻弄^{はんろう}されたものだわ」やるせなさ^{はら}を孕^{はら}んだ凜の吐息^{といき}がもれる。

「り、凜ちゃんがダウンナーモードに入っちゃってます!」

「さけんきけんー!」

「ほらまり花、あんたのせいよ」

「わ、わたし?」

そんな自覚がこれっぽっちもないまり花が、やんややんやと言われて立ち上がった。

「えっと……大丈夫だよ凜ちゃん! 金魚すくいが苦手でも射的があるよ!」

「そっじゃないでしょ!」

スパンツといい音を立ててイブがまり花の頭をはたく。

「痛い! 今のは痛いよイブ!」

「これくらいしないとダメでしょあんたは！ それにしてもいい音がしたわ……まり花、今度から頭を打楽器にしたら？」

「そんなことしたらキーボードが弾けないよっ！」

「そ、そっちなんだ……」

相変わらずズレているまり花だった。

「はあ……もういいわ」

凜はやれやれと肩をすくめながら立ち上がると、持ってきたギターケースを開けた。

「納涼祭の話はちゃんと聞くとして、最初にちょっとやらない？ レコード屋のオトボケを聞いていたら、自分がバンドに入ってたって忘れそうだわ」

ちなみに、レコード屋というのはまり花のことだ。ちよつとばかりややこしい性格をしている凜は、バンドメンバーのことを、それぞれの家業である店の名前で呼ぶ。

イブは洋服屋、咲子は喫茶店、めうはハンコ屋である。もうずっとそう呼んでいるので、メンバー内では特に違和感なく受け入れられている。

「まあ、イブはいいけど」

「わたしも賛成です」

「れつつみゅーじっく！」

「うう……イブのイジワル……」

何やかんや言いながら、五人はそれぞれ自分の楽器を持って配置についた。

まり花はキーボード。

イブはベース。

咲子はアコースティックギター。

めうはドラム。

凜はエレキギター。

「んじゃ！ いってみよっ！」

落ち込んでいたさっきまでの涙はどこへやら、まり花がメンバーを振り返って音頭を取る。

こういう瞬間だけはバンドのリーダーっぽく『凜っ！』とした顔を見せるのだった。

一通り気が済むまでの演奏して、

「ふっ……今日もいい調子ね！」

ベース音を響かせてイブが悦に入る。

「とっってもとっても良い感じですよ！」

「今日もぜっこーちょーっ！」

咲子とめうも気持ちよく演奏できてご満悦である。

「うーん……」

ただ、まり花だけはちよつと首をかしげていた。

「どうしたのよ、難しい顔なんて似合わないわよ」

「なんていうか、そのお……」

言いくそうに言葉を濁したまり花が、チラッと凜を見た。

「凜ちゃん……何かあった？」

「……別に。問題なく弾けたわ」

凜はいつも通りにクールに返す。

「音はそうなんだけど……なんか、こう……うむむ、上手く言えないよう……」

「そんなことはともかく、大切なのはライブコンテストよ！」

まり花をさておいて、イブが仕切り直すように言った。

「チラシによると、特別な参加資格は必要ないみたいね」

「誰でも申し込めるんですか？」

「そうみたい。でも時間の都合があるから、申し込みが多すぎると抽選^{ちゆうせん}みたい」

「抽選……悲しい響きだわ。私の演奏を聴^きけない人が出てきてしまうなんて……」

「凜、勝手に哀^{かな}れまないの」

抽選にもれたら聴けない以前に、演奏自体ができなくなる。

「ちょこつと探^{さぐ}りを入れたんだけど、今のところは全然余裕^{よゆう}みたい。参加グループが多いと抽選とか書いてあったけど、その心配はなさそうよ」

「イブすごい！ たんてーみたい！」

「イブの顔は広いんだから！」

「イブブ顔が大きい？」

「そういう意味じゃない！」

めうに律儀^{りつぎ}にツツコミつつ、イブはライブコンテストのポスターをテーブルの上に広げた。

「ただし、時間には厳しいみたいね。グループに割り当てられた時間内に、準備から演奏、そして撤収^{てつしゆ}までやらないとアウト。ちよつとでも持ち時間を越^こえたら審査^{しんさ}の対象外になっちゃうみたい」

「チャスコさん、とつてもとつても厳しいです……」

「大人数をさばくからね。えこひいきはできないってことでしょ。まあ準備と撤収^{てつしゆ}につい

ては、ステージスタッフさんも手伝ってくれるみたいだけど」

「そうなると遅刻は厳禁だね……わたし、ちゃんと起きられるかな……」

ふたたび復活したまり花も加わる。

「起きるって……学校じゃないんだから。コンテストが始まるのは昼過ぎよ？」

「甘いよイブ！ お休みの日のお布団は気持ちいいんだよ！」

「どんだけ寝てるのよ……」

「ちゃんとお昼に目覚ましセットしなきゃ……」

「いや、当日も練習するから。朝から集合だから」

「イブひどい！ わたしがお休みの日に起きられないって知ってるのに！」

「ただ子供なのよ……」

呆れ果てるイブだった。

「それで洋服屋、この私たちの前に立ちはだかろうとする愚昧な者はどのくらいいるの？」
凜が王者の風格を漂わせて——本人だけはそのつもりだ——尋ねる。まあ、そんな態度も慣れっこの『ひなビタ♪』メンバーだから、あっさりとスルーされるのだが。

「昨日の時点で定数の三割つとところね。やっぱり会場が大きいし、お客さんもたくさん集まるってことで遠慮しちゃってるのかも」

「大舞台ですもんね」

「まっ、イブたちには関係ないけどね！」

日向美商店街を盛り上げるためにバンドを組んだのだ。目立つのが怖くてバンドなんてやってられない。

「……と、そういうわけだから、申し込んでやって問題ないわよね？」

『はい！』

一同が——凜だけはボソツと——元気に返事する。

ライブコンテストまで、残り一ヶ月弱のことだった。